

平成 27 年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業
(特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究)」報告書

団体名	福井県
研究開始年度	平成27年度

1 指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
公立	特	病弱、肢体不自由	ふくいけんりつふくいひがしとくべつしえんがっこう 福井県立福井 東 特別支援学校

2 研究テーマ

病気や重度・重複障害等のある児童生徒に対するICTを活用した指導内容・方法に関する実践研究

3 研究の概要

- 「円滑な転学」「情緒面での課題を抱える児童生徒の教育」に関する研究
研究助言者から全国の病院併設の病弱特別支援学校に学ぶ児童生徒の現状と課題の情報を得ながら、今後の交流及び共同学習や小・中・高等学校と特別支援学校との円滑な転学、情緒面での課題を抱える児童生徒の教育について研究助言者から助言を得ながら研究を進める。
- 障害や特性に応じたICTの活用
ICT支援員から指導助言を得て児童生徒の障害や特性に応じた有効なアプリケーションや支援機器の作成と活用、モバイル通信回線による遠隔授業について以下の3項目に取り組む。
 - (1) 重度・重複障害のある児童生徒への活用
自立活動を中心に学校生活全般における、タブレット端末やコミュニケーション支援アプリケーションソフトを活用した代替コミュニケーション手段に関する事例研究。
 - (2) 病弱の児童生徒への活用
タブレット端末や教育コンテンツ等を活用した、各教科等における指導内容や方法及び児童生徒理解等に関する授業研究。
 - (3) モバイル通信回線による遠隔授業
本校と分校と分教室、自宅や病室、小・中学校や校外施設等の外部との遠隔授業（交流及び共同学習や校内の教室間の授業等を含む）。
- ICT支援員によるICT機器活用に関する教員研修

○教育課程に関する検討

校内の教育課程編成委員会において、小中学部や高等部の「自立活動を主とした教育課程」の学習内容や課題、対象となる児童生徒を整理し、この教育課程の指導内容の範囲と指導計画について検討する。

4 研究の成果

○「円滑な転学」「情緒面での課題を抱える児童生徒の教育」に関する共同研究

入院に伴って転入した児童に対するタブレット端末（以下 skype）を用いた前籍校との遠隔授業では、病室にいる児童が前籍校の教室の児童たちと一緒に教科書を読んだり質問に答えたりする中で、学習意欲の向上や前籍校の様子が分かることでの安心感につながった。また、他者との会話や集団参加が困難で、登校後も学校や教室に入れない生徒に対しては、skype を用いて保護者送迎時の自家用車内や生徒玄関、個別指導教室から教室の様子をリアルタイムで視聴しながら、活動や集団に対する不安の軽減、授業の見通しの促進、教員とのコミュニケーション等を図ることで、他の生徒と一緒に教室での活動に参加できるまでに変容した。

○障害や特性に応じた ICT の活用

（1）重度・重複障害のある児童生徒への活用

絵本が視聴できるアプリケーションソフトと操作補助機器（以下 スイッチ）等を用いた取組では、重度・重複障害のある児童生徒がスイッチを押すことで画面が変化することを理解したり、画面の変化に合わせた教員の関わりを理解して教員の動きや言葉を期待してスイッチを押す動きが見られたりした。ICTを活用することにより、重度・重複障害のある児童生徒のコミュニケーション活動に広がりが見られた。

（2）病弱の児童生徒への活用

自立活動及び各教科において、プレゼンテーションソフトを用いて発表資料を作成した生徒は、発表内容を容易にまとめることができたり、タブレット端末を用いることにより画像や文字を読むことで発表への抵抗感が軽減したりした。また、数学では、計算問題のソフトを用いることにより本人のペースで学習が進められたり、体育では生徒の動きをタブレット端末のカメラ機能を用いて撮影することで自分の身体の動きを確認することに活用したり、正答数や運動の記録をグラフ化して視覚的に示したりすることで学習意欲や体力等の向上につながった。

（3）モバイル通信回線による遠隔授業

①特別支援学校間（本校一分校間・本校一分教室間）

本校と分校のそれぞれの中学部生徒が、遠隔授業により修学旅行の計画について意見交換を行った。また分教室とでは、設備の面で実施できない理科実験やALTとの会話等の遠隔授業を行った。特に、恥ずかしさや入院していることを知られたくない思いから前籍校との遠隔授業には消極的であった分教室の生徒が、本校の生徒とつないだ授業では発言する場面も見られ、前籍校との遠隔授業実施の前段階となった。

②特別支援学校と生徒自宅間

通学が困難な医療的ケアが必要な生徒に対し、自宅で教室の授業を視聴する遠隔授業を実施した。教室と生徒の自宅間で双方向のやりとりができることから、本人も保護者

も学校の様子を楽しみにし、映像をとおした教員の問いかけに対し、生徒は表情や瞬きによって意思表示をすることができた。また、人との関わりに不安がある不登校の生徒に対しては、家庭訪問による学習に加えて学校の学習の様子を視聴する遠隔授業を行うことで、他の生徒や学校での活動に関心を示す様子が見られた。

③特別支援学校と地域の中学校間

中学校（特別支援学級）との交流及び共同学習において、直接交流を行った後に遠隔授業による事後学習を行った。交流先の生徒は特別支援学校の生徒の名前を覚えており映像をとおした活動や会話ができた。

④特別支援学校と校外施設間

県立恐竜博物館と理科の遠隔授業を行った。病気等のため校外での活動が難しい生徒にとって見学と同様の体験ができた他、生徒は博物館学芸員に積極的に質問する等、意欲的に学習する姿が見られた。

○ICT支援員によるICT機器活用に関する教員研修

本校・分校・分教室においてICTを活用した授業参観を行い、機器やアプリケーションソフト使い方、重度・重複障害児への機器操作支援及び活用方法等について、ICT支援員から個別に指導・助言を受けた。事例ごとに具体的な指導を受けることによって実践が進み、様々な授業の授業改善へ波及していった。

○教育課程に関する検討

不登校など情緒面での課題を抱える生徒については、精神面での安定を図ることを第一の目標として自立活動を主とした教育課程を編成している。年度当初は玄関に入ることさえ抵抗を示していた生徒の事例では、活動の場所や内容、関わり方、タブレット端末の活用方法など、学部内の担当教員同士で個別の指導計画を見直しながら段階的に指導を進めた。教室での活動や他の生徒との関わりが徐々に広がっていくのに合わせて、もの作りや教科的な学習、校外学習や学校行事への参加へと活動を展開させることができた。

5 課題と今後の方策

○「円滑な転学」「情緒面での課題を抱える児童生徒の教育」

遠隔授業という方法で前籍校との授業に参加することは、入院中の児童生徒や保護者の安心感につながる。その一方で、治療による容姿の変容を見られたくない、恥ずかしい、病気であることを知られたくない等の理由から、前籍校との遠隔授業を希望しない場合も多い。遠隔授業実施に当たっては、児童生徒の状態や心理面、前籍校での友達関係等を把握して慎重に取り組む必要がある。また、情緒面での課題を抱える児童生徒への対応については、過去の経験が一人ひとり異なることから、他の生徒の関わり方や授業内容等、授業参加について検討と共通理解、本人の不安への対応が重要である。

○障害や特性に応じたICTの活用

重度・重複障害のある児童生徒の場合、様々なアプリケーションソフトの中から学習内容に合わせた選択や、活用方法、児童生徒自身がスイッチ等のICT機器を操作することの難しさがある。障害の程度や特性に応じたタブレット端末と絵カード等の併用や、児

児童生徒が機器操作して意思表示をするためのスイッチ及び視線入力装置の活用方法や活用場面の検討が必要である。

病弱の児童生徒に対する自立活動や各教科における課題としては、授業改善の視点で、児童生徒の学習意欲を高めたり理解を図ったりするツールの一つとして、教員がタブレット端末を活用する意識がやや低い面がある。児童生徒一人ひとりの指導方法について事例検討を重ねる中で、教員に対して学習支援としてのICT活用をさらに意識づけていく必要がある。また、児童生徒一人ひとりの関心や知識理解が異なるため、学習内容の精選と、教員と児童生徒や児童生徒間の双方向の意見交換ができる活動を考慮した活用が求められる。

モバイル通信回線による学校間、学校と自宅や病室間との遠隔授業では、授業実施までに教員による児童生徒の情報交換や通信状態のチェック、授業の流れや発問等の打合せ、遠隔授業での配慮事項の確認等を行う必要がある。

○教員研修

ICT支援員による授業参観をとおした個別研修の他、全教員が集まった全体研修を2回実施した。活用方法及びその成果を確認し合うだけにとどまらず、課題についても共通理解して改善に向けた意見交換を深めることが必要である。

○教育課程に関する検討

現行の様々な類型の教育課程において、今年度はICTを活用した授業を実践した。また、実践の経過と結果をまとめたことによって、個々の事例について指導内容と方法を見直し、次年度の個別の指導計画を作成している。特に自立活動を主とした教育課程については、児童生徒一人ひとりの障害や病気、対人関係等の特性を十分に考慮して、個別の指導計画を作成している。本実践研究の結果を踏まえて、ICTを活用した内容を含めた自立活動の各分野の内容の構成と時間配分、各教科等との関連性、学習評価、卒業後の社会生活等の観点からの検討が必要であり、当該学部及び教育課程編成委員会で協議していく。

以上の成果・課題を踏まえ、今後も、①病弱及び重度・重複障害の児童生徒に適した自立活動及び各教科におけるICTを活用した授業研究、②心理面での課題を抱える生徒の授業参加に向けた校内外との遠隔授業、③病状を踏まえた前籍校等の遠隔授業、④小・中学校・高等学校・特別支援学校・地域との交流及び共同学習におけるICTの活用について実践を重ね、これらの研究をとおして、指導内容や方法、学習評価についてまとめていきたい。